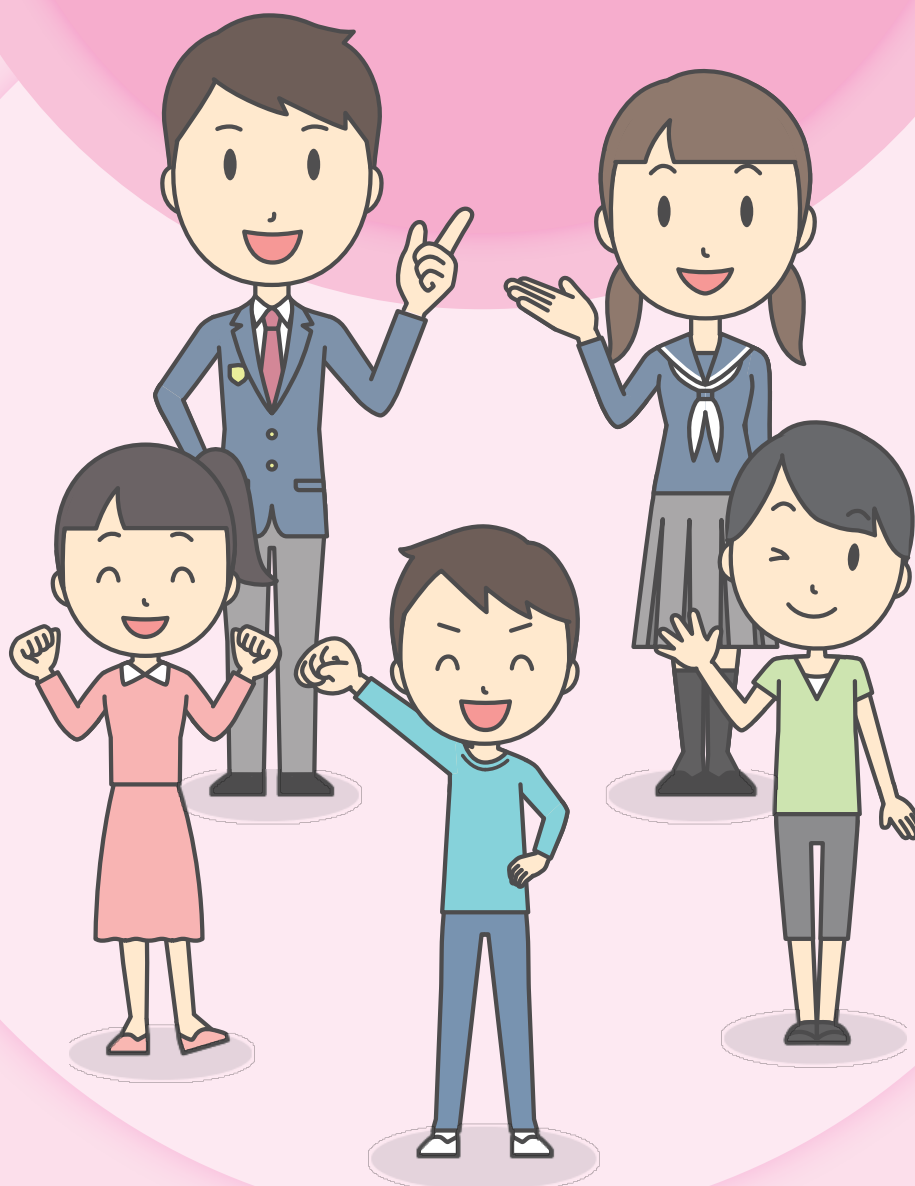


落ち着いた 学級づくりに向けて

～Q-U、*hyper-QU*を
活用した課題対応～



岡山県教育庁人権教育課

平成31年3月

はじめに

家族形態の変化や家庭の教育力の低下、インターネットの普及による情報化、地域社会のつながりの希薄化等、子どもをとりまく環境が急激に変化する中、県内の学校における暴力行為やいじめ、不登校については憂慮すべき状況にあり、早急な対応策が求められます。また、いじめや不登校等の背景にある児童生徒間の人間関係は、教員にとって見えにくく分かりにくくなっているという現状も見受けられます。

こうした状況を踏まえ、岡山県教育委員会は、平成25年度からの「明るい学校づくり支援事業」と、平成28年度からの「落ち着いた学級づくり支援事業」で、Q-U、*hyper-QU*等を活用した学級・学校づくりを支援してきました。

Q-U、*hyper-QU*は、学校生活における児童生徒の満足感や意欲、学級集団の状態等を質問紙によって測定するもので、実施校においては、教員の日常観察や面談による児童生徒理解を補い、児童生徒や学級の状態の客観的・多面的な理解に活用でき、いじめや不登校、学級の荒れ等の未然防止に役立てることができます。また、教育活動や学級経営を検証したり、困難な状況にある学級に対する組織的な対応策を検討する客観的データとして活用したりすることもできます。

この度、Q-U、*hyper-QU*を活用している小・中学校に聞き取り等を行い、調査結果から捉えた児童生徒や学級の課題に対する効果的な取組事例を収集するとともに、実施する上での留意点等をまとめました。Q-U、*hyper-QU*等の結果が有効に活用されることにより、全ての児童生徒が安心して学校生活を過ごし、意欲的に学習や活動に取り組むことができる落ち着いた学級・学校となるよう、本書を役立てていただければ幸いと存じます。

なお、本書ではQ-U、*hyper-QU*について説明していますが、*i-check* やアセス等、その他の調査を活用する場合も、本書に掲載している留意点や活用例等を参考にさせていただきたいと思います。

最後に、作成に当たり、指導助言をいただきました高知大学大学院総合人間自然科学研究科教授鹿嶋真弓先生、取組事例を御提供いただきました事業実施校の皆様方に対し、心からお礼申し上げます。

平成31年3月

岡山県教育庁人権教育課長

石原伸一

目 次

○ はじめに	1
1 本書の活用に当たって	
(1) 学級集団の正しい理解のために	3
(2) Q-U等について	3
2 Q-U等の実施、分析等について	
(1) 実施に当たっての留意点	6
(2) 実施直後に確認すること	6
(3) 結果の分析と課題対応の検討	7
① 学級全体の分布の様子	
② 配慮が必要な児童生徒の確認	
③ ヘルプシグナルチェック	
④ 配慮が必要な児童生徒の確認等での留意点	
⑤ 課題に対応した取組の検討	
3 課題への対応事例	
(1) かたさの見られる学級集団(管理型)での取組事例(A小学校)	10
(2) ゆるみが見られる学級集団(なれあい型)での取組事例(B小学校)	12
(3) 荒れの兆しのある学級集団(荒れ始め型)での取組事例(C中学校)	14
(4) 中間層の生徒への取組事例(D中学校)	16
〈資料〉	
「落ち着いた学級づくり支援事業(平成29年度)」の概要	17

1 本書の活用にあたって

(1) 学級集団の正しい理解のために

学級経営においては、児童生徒がどのような課題を抱えているか、課題を抱える児童生徒が学級にどの程度いるのか、さらにその学級集団は全体としてどんな状態なのか等を正しく理解して取組を進めることが重要です。そのためには、観察や面談で得られた情報だけでなく、Q-Uやhyper-QU等のアンケート調査を行い、客観的なデータも加えて、児童生徒や学級集団を総合的・多面的に判断し、見立てることが大切です。

アンケート調査には、Q-Uやhyper-QU、i-check、アセスの他、児童生徒の実態に即した学校独自の調査もあります。こうした調査を効果的に活用することにより、児童生徒一人一人が学校生活について感じたり、思ったりしていることを理解することができますとともに、いじめを受けている可能性のある児童生徒や、不登校の心配のある児童生徒等を早期に発見し対応することができます。また、調査結果を分析し、学級集団は全体としてどんな状態なのかを把握して、学級の荒れを未然に防ぐことも可能です。さらに、アンケート調査を複数回行った場合、その結果をもとに学級経営や教育実践の効果の検証を行うことも可能であり、こうした活用は、教員間の協働性や同僚性を発揮して、教育活動を推進する動機づけにもなります。

なお、県内の多くの学校ではQ-U、hyper-QUを活用しているため、本書では、Q-U、hyper-QU（以下、「Q-U等」という。）の実施上の留意点や分析方法、課題への対応事例等を掲載しています。

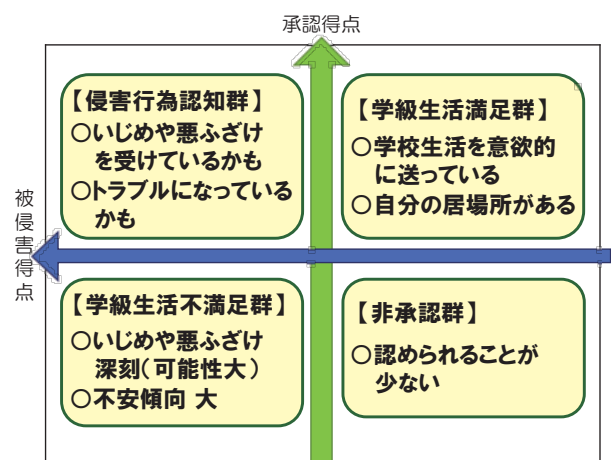
(2) Q-U等について

Q-Uは、小学校1～3年用、小学校4～6年用、中学校用、高校用の4種類があり、児童生徒の発達段階に応じた質問に回答することにより、学級に対する満足度と学校生活での意欲を測定します。hyper-QUは、これらに加え、児童生徒のソーシャルスキル（対人関係を営む技術）を測定することができます。

学級に対する満足度については、学級にトラブルやいじめなどの不安があるか（被侵害得点）を横軸に、自分が級友や教員から受け入れられているか（承認得点）を縦軸に示したプロット図によって示されます。そして、このプロット図により児童生徒を4つの群に分けて理解します。（図1）

プロット図の座標で、2つの軸が直交しているポイントが全国平均値として示され、被侵害得点と承認得点の2つの得点から、図1の4つの群のどこに位置付くかにより、児童生徒の状態が分かります。

一方、学級の児童生徒一人一人が安心して学校生活を過ごし、学習や活動に意欲的に取り組むことができる、親和性のある学級であるためには、学級に「ルール」と「リレーション※」の2つの要素が確立していることが必要条件です。（次ページ図2）

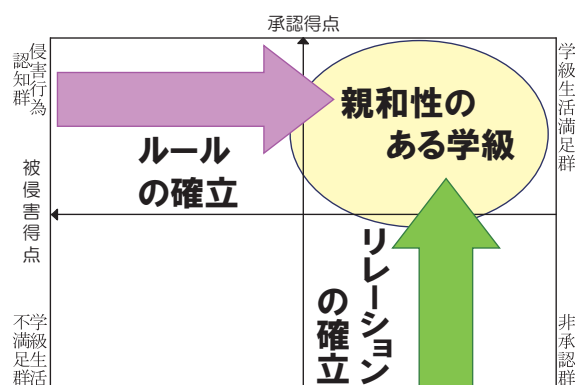


(図1) Q-U等のプロット図における4つの群

※リレーション：互いに構えのない、ふれあいのある本音の感情交流のある状態
（「学級づくりのためのQ-U入門」著者：河村茂雄 図書文化 2006）

児童生徒一人一人の被侵害感を抑えて学級集団にルールを確立するには、学級の児童生徒全員にルールが理解され、定着するように一貫した指導を行うことが大切です。

また、承認感を高めて学級集団にリレーションを確立するには、互いに構えのない人間関係を学級の中に築くことができるように、日常の学校生活におけるきめ細やかな指導や配慮を行うことが必要です。

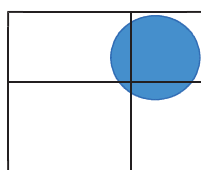


(図2) 親和性のある学級づくりのための必要条件

Q-U等では、プロット図の児童生徒の分布がどのようになっているかをもとに、学級集団を次の①～⑥のように大きく6つの型に分類することができます。よりよい学級集団づくりを行うには、この6つの型の特徴を理解した上で、それぞれの型に対応した取組を実践することが大切です。

① 親和性のある学級集団（満足型）…ルールとリレーションが確立している

特徴



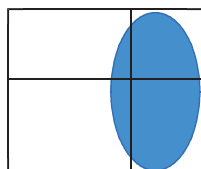
- ・児童生徒が互いに認め合える雰囲気、グループを越えて協力することができる。
- ・学習に対して積極的で、児童生徒が主体的に活動に取り組むことができる。

対応例

- ・多様な学習形態を取り入れるとともに、応用・発展的な内容にも取り組ませる。
- ・教員主導ではなく児童生徒が主体となった活動を増やす。

② かたさの見られる学級集団（管理型）…リレーションの確立が低い

特徴



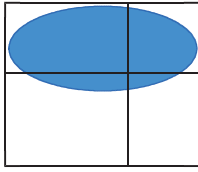
- ・静かに授業は展開するが、一部の児童生徒だけが意欲的で、間違いや失敗を恐れて、発表する児童生徒が限られている。
- ・教員の指導に対して受け身で、学習課題に積極的でない。

対応例

- ・結果だけでなく地道に取り組んだ過程や、発想のおもしろさ等の多様な着眼点を示し、全ての児童生徒が認められる場面や児童生徒同士で認め合う場面を作る。
- ・児童生徒の緊張感を取り除くため、小さな頑張りを認める言葉かけをしたり、教員自ら失敗談を自己開示したりする。

③ ゆるみの見られる学級集団（なれあい型）…ルールが低い

特徴



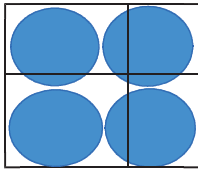
- ・一見明るく、活気のある雰囲気のように見えるが、私語が多く、人の意見が聞けなかったり、冷やかしが多くなったりし、特定の児童生徒やグループが自己中心的な発言をする。
- ・一見活動的に授業は展開するが、学習活動が表面的で学びが深まらない。

対応例

- ・授業や活動の前に、活動内容やその目的、役割分担等を全体で確認する。
- ・できていない児童生徒を注意するだけでなく、きちんと取り組んでいる児童生徒を認めることによって、ルールの定着を図る。

④ ばらばらな学級集団（拡散型）…ルールとリレーションの共通感覚がない

特徴



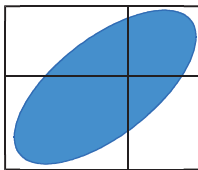
- ・自分勝手な行動をしている児童生徒が多く、教員の指示が通りにくい。
- ・児童生徒の学級に対する帰属意識が低い。

対応例

- ・教員は適切なリーダーシップにより、認める視点を決め、児童生徒の行動目標を方向づけて、ルール作りを行う。
- ・教員が中心となって、児童生徒同士が関わる場面設定をする。

⑤ 荒れの兆しのある学級集団（荒れ始め型）…ルールとリレーションの確立がともに低い

特徴

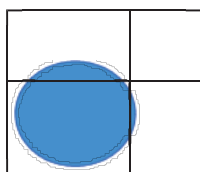


- ・私語、身勝手な行動、妨害行為があり、授業に集中できない。
- ・一斉指導が成立しにくく、学習内容が定着しない。
- ・まじめに取り組みたい児童生徒も、周囲を意識して、学習に素直に向かえない。

対応例

- ・個別に承認や支援等ができるように、個人で学習に取り組む時間を増やしたり、係活動を一人一役にして責任の所在を明確にしたりする。
- ・担任だけでなく、組織的に、同一步調で児童生徒に対応する。

⑥ 荒れている学級集団（崩壊型）…ルールとリレーションが確立していない



特徴

- ・日々の授業が成り立たない、いわゆる学級崩壊の状態。
- ・教員の指示がほとんど通らず、常に騒がしい。
- ・児童生徒は、自分の不安を軽減するために、同調的に結束したり、他の児童生徒を攻撃したりしている。
- ・いじめられている児童生徒がいる可能性が非常に高い。

対応例

- ・小学校なら学年団や専科教員、中学校なら学年団の協力を得て複数の教員で対応するとともに、共通理解のもと、一貫性のある指導を心がける。
- ・児童生徒が個人で学習に取り組む時間を設定し、教員が個別にその頑張りを認める場面を増やす。
- ・無記名で学級に対する思いや要望を書かせ、その思いを全体に伝えたり、みんなで合意できるものを採択したりして、ルールの確認と定着を図る。

参考「学級集団づくりのゼロ段階」著者：河村茂雄 図書文化 2012

「応研レポートNO.81」監修：河村茂雄 編集：一般財団法人応用教育研究所 2013

2 Q-U等の実施、分析等について

Q-U等を実施し、その結果を活用するためには、まず、教員が実施に当たっての留意点や、結果の分析、課題への対応等について理解することが大切です。

(1) 実施に当たっての留意点

自分の心理状態を率直に回答できるように、Q-U等をなぜ行うかについて、児童生徒に分かりやすく伝える必要があります。「一人一人を大事にしたいから」、「いじめのないクラスを作りたいから」等、目的を具体的に伝えることが大切です。

また、年度初めのクラス替えの直後、行事の前後等、普段とは違う特別な時期を避けて実施日を設定する必要があります。児童生徒の学校生活が落ち着いている時期の方がより正確な結果が得られます。

(2) 実施直後に確認すること

Q-U等は教員が結果を集計することができるものもありますが、多くの学校では、集計を業者に依頼しているのが現状です。業者に依頼をした場合、通常、学校に結果が届くまで1か月程度かかります。アンケートのデータは生ものですから、業者に発送する前に一人一人の回答を確認することが大切です。回答状況を確認しないまま業者に発送し、いじめや不登校への対応が1か月遅れてしまえば、勇気を出してSOSを発した児童生徒を傷つけ、教員への信頼を失うこととなります。実施直後に「悪ふざけをされる」「無視される」「学校へ行きたくない」等の質問項目の回答状況を確認して、心配な児童生徒には早急に対応する必要があります。

(3) 結果の分析と課題対応の検討

Q-U等の結果が業者から返却されたら、学級集団の状態を確認するとともに、「どの児童生徒」が「どんな問題を抱えているか」を確認して、「どんな配慮が必要か」「どんな手立てが可能か」を考えることが重要です。

① 学級全体の分布の様子

Q-U等の結果の一部は、プロット図によって、学級集団の状態が視覚的に表されます。P. 4～6にある6つの型のどれに近いのか見当をつけ、ルールやリレーションについて、これまでの取組を振り返るとともに、今後の取組について方針を立てます。

② 配慮が必要な児童生徒の確認

次に一人一人の状態を確認しながら、次の手順に従い、配慮が必要な児童生徒を確認します。

配慮が必要な児童生徒の確認の手順

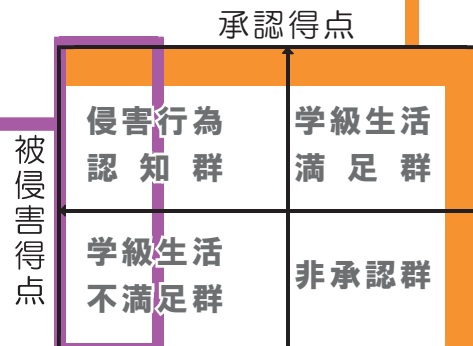
- ㊦ プロット図の番号に児童生徒の名前を書くなどして、一人一人の状態を確認し、被侵害得点の高い児童生徒、承認得点の低い児童生徒、両方に当てはまる児童生徒をピックアップする。(図3)に示す「見落し率が高いゾーン」の児童生徒は、いじめや不登校の可能性があるにもかかわらず、教員が大丈夫と判断し、見落してしまうことが多いので注意が必要である。
- ㊧ 日頃の観察や面談で気になる児童生徒の位置を改めて確認する。
- ㊨ 教員の予想と違う位置にいる児童生徒がいないか確認する。(図3)の「分布の端のゾーン」の児童生徒は、学級生活満足群に属していたとしても、正直に自分の気持ちを回答していない可能性があるため、配慮が必要な場合がある。
- ㊩ 2回目以降の検査の場合、前回と大きく分布の位置が変わった児童生徒がいないか確認する。

分布の端のゾーン

正直に自分の気持ちを回答していない可能性があるため、慎重に確認する必要がある。

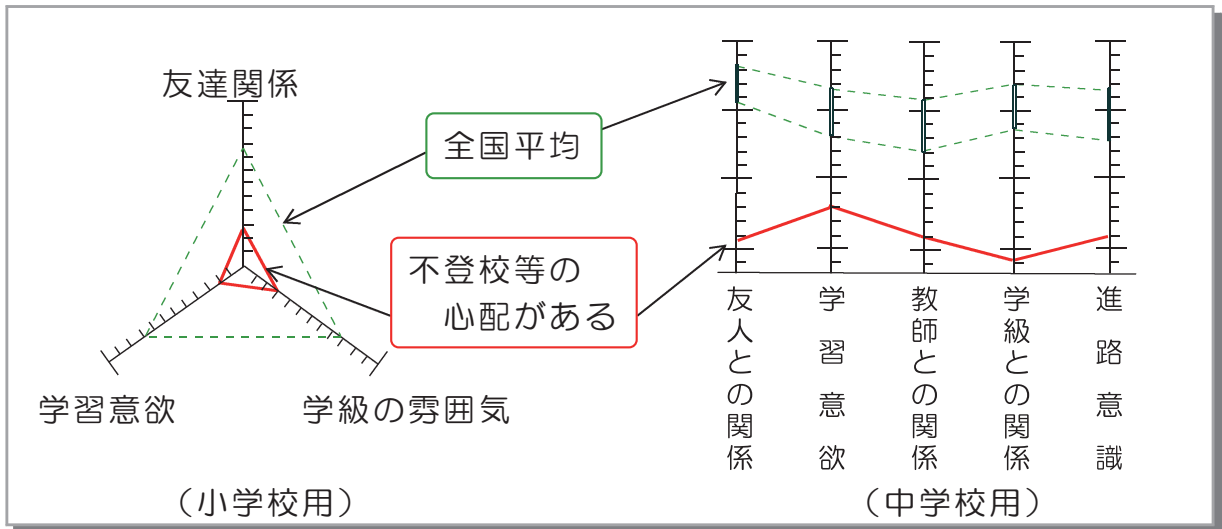
見落し率が高いゾーン

教員が大丈夫と思っても、いじめや不登校の可能性があるため、慎重に確認する必要がある。



(図3) プロット図における注意
する必要があるゾーン

一人一人の状態が分かる学校生活意欲プロフィール（図4）からも、配慮が必要な児童生徒を確認することができます。特定の項目が極端に低い児童生徒には特に配慮が必要です。また、小学校では、三角形の面積が小さくなっている児童、中学校では、折れ線が低い位置にある生徒は、学校生活における意欲が全体的に低く、不登校等の心配があります。



(図4) 学校生活意欲プロフィール

③ ヘルプシグナルチェック

次のように、学級の回答一覧表の回答番号に色をつけて表す作業（ヘルプシグナルチェック）を行うと、一人一人の回答状況や配慮が必要な児童生徒を確認できるとともに、学級集団の傾向をつかむことができます。

ヘルプシグナルチェックの手順

㊦ 肯定的な質問の回答の番号に対して次のように印をつける。

「全くそう思わない」に **赤色**、「あまりそう思わない」に **黄色**

㊧ 否定的な質問の回答の番号に対して次のように印をつける。

「とてもそう思う」に **赤色**、「少しそう思う」に **黄色**

縦に見て印が多くついた質問を確認することで、学級集団の課題が分かる

横に見て印が多くついた児童生徒を確認することで、配慮が必要な児童生徒が分かる

	肯定的な質問						否定的な質問								
	1	2	3	4	5	6	11	12	13	14	15	16			
1	0	0	0	3	4	4	5	3	4	1	2	1	4	2	3
2	0	0	0	3	3	2	3	4	3	1	2	2	4	3	1
3	0	0	0	5	4	5	4	4	5	1	1	2	1	1	2
4	0	0	0	1	2	2	1	1	2	2	3	4	5	4	5
5	0	0	0	4	4	5	4	2	4	2	2	3	4	1	2

5…とてもそう思う、4…少しそう思う、3…どちらとも言えない
2…あまりそう思わない、1…全くそう思わない

㊨ 回答の内容から、個人及び学級集団について「何に課題があるのか」（生活面、学習面、人間関係…等）を確認する。

ヘルプシグナルチェックは単純な作業ですが、実際に児童生徒がどのように回答しているのか、何に課題があるのかを効率的に確認することができます。プロット図の確認と合わせて、ヘルプシグナルチェックを行い、どの児童生徒が、どのようなことを課題と思っているのか確認しましょう。

④ 配慮が必要な児童生徒の確認等での留意点

配慮が必要な児童生徒を確認したり、ヘルプシグナルチェックを行ったりするときに留意することが2点あります。

1点目は、Q-U等の結果だけで判断するのではなく、日頃の教員の観察や面談と合わせて分析することです。Q-U等の結果では問題がなくても、日頃の観察等で気になることがあれば、それは児童生徒の状態を理解するために必要な情報です。Q-U等の結果に日頃の観察や教育相談の内容、他の教員から得られた情報を加え、児童生徒や学級集団の状態を多面的に分析することが大切です。

2点目は、複数の教員でQ-U等の結果の確認を行うことです。担任だけで判断するのではなく、複数の教員で多面的に分析し、いじめや不登校等を見落とさないようにしましょう。また、必要に応じてスクールカウンセラーにも結果を見てもらい、情報共有しておくことも大切です。

⑤ 課題に対応した取組の検討

学級集団の状態や配慮が必要な児童生徒を確認できたら、課題に対応した取組を検討しましょう。

ルールを確立するための取組例

- 教室の環境整備をする。
- チャイム着席・発表などの学習ルールや当番・係活動などの生活ルールの見直し・意義や必要性を再確認する。
- 望ましい行動をクローズアップする。（黒板メッセージ）
- ルール定着度を通信や掲示物で評価する。
- 会話など対人関係のマナーを学習する。
- ソーシャルスキルトレーニングを行う。 等

リレーションを確立するための取組例

- 頑張っている児童生徒を学級通信等で紹介する。
- 連絡帳や生活ノートを活用する。
- 承認感の低い児童生徒や自信のない児童生徒の活躍場面や発表場面を作る。
- 非言語の承認行為を意識的に行う。
- 賞賛や勇気づけの関わり方を意識する。
- 構成的グループエンカウンター等を用いた人間関係づくりを行う。 等

3 課題への対応事例

(1) かたさの見られる学級集団（管理型）での取組事例（A小学校5年生 34人）

【現状の把握】

教員の観察、面談等による把握	Q-U等の結果
<ul style="list-style-type: none"> ・全体的に落ち着いているが、善悪の判断が付きにくく、自制することができない児童の言葉に流され、学級の雰囲気が一時的に崩れることがある ・一部の発言力の強い児童が作る雰囲気についていけず、活動に対して消極的になっている児童がいる。 	<div data-bbox="960 510 1283 819" style="text-align: center;"> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・ルールは確立しているが、リレーシヨンの確立が低い。 ・学習意欲が低い児童が多く、また、ソーシャルスキルのうち、「関わり」のスキルの値が低くなっている。



【分析結果】

- ・教員の指導によりルールが確立されているように見受けられるが、満足群にいる一部の児童の学級の中での影響力が大きくなっている。
- ・自分に自信が持てないことから、発言力のある児童に気をつけて学級の中で積極的に活動できない児童がいる。



具体的な取組

※次ページ参照

【目指す学級集団像】

- ・全ての児童が自分の意見を言いやすい集団。
- ・児童同士が関わり合いながら様々な視点で認め合える集団。

具体的な取組

《全ての児童が自分の意見を言いやすい集団》を目指した取組

○押し付けない

宿題をしない、忘れ物が多いなどの課題の見られる児童に対しては、なぜ宿題をしてこないのか、なぜ忘れ物をしてしまうのか考えさせるとともに、今後どのように取り組んでいきたいかを教員と一緒に考えた。そこでは、児童自身が家庭学習や基本的な生活習慣の大切さを感じ、主体的に取り組む姿勢になるように教員が根気強く関わった。

○つぶやきタイム

授業の中で自由に発言してよい時間「つぶやきタイム」を作り、できるだけ多くの児童に発表させた。事前に、出た意見に「間違い」はないことを強調し、多様な考え方の大切さについて説明した。通常の挙手をして発表する時間と、「つぶやきタイム」を課題に合わせて使い分けた。



《児童同士が関わり合いながら様々な視点で認め合える集団》を目指した取組

○「きらりさんの紹介」

朝の会でくじ引きをして、その日のきらりさんを児童が分からないように決めた。他の教員にも協力してもらい、そのきらりさんの一日の様子を観察した。帰りの会で「今日のきらりさんは□□をしてくれました。誰でしょう？」のようなクイズ形式で共有した。また、その内容を付箋に書いて教室に掲示した。



○豊富な活躍の場面設定

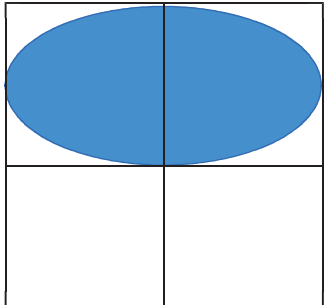
算数の計算練習の時間に、早くできた児童を「ミニ先生」に任命し、他の児童にやり方を教えるなど、様々な児童と関わり、活躍できる機会を作った。また、グループの調べ学習において、様々な調べ方（書籍、インターネット、地域の方へのインタビュー等）や、まとめ方（文章、グラフ、イラスト等）を示し、日頃目立たない児童でも、多様な活動の中で自分の得意なことを活かすことができるような役割を設定した。

【取組後の学級の状態】

- ・児童自身に考えさせ、自分の考えを伝える場面を設定したことから、今まで様々な場面で消極的だった児童から多様な意見やアイデアが出るようになった。
- ・互いが認め合える場面を多く設定したことから、普段関わりの少なかった児童の良い面に気づき、関係が深まることで、各自が学級の中で伸び伸びと生活できるようになった。

(2) ゆるみの見られる学級集団（なれあい型）での取組事例（B小学校5年生 26人）

【現状の把握】

教員の観察、面談等による把握	Q-U等の結果
<ul style="list-style-type: none">・学力の高い児童や、思ったことを遠慮なく言う児童の意見が反映されることが多い。・学級の中でおとなしい児童の良いところが認められる場面が少ない。	 <ul style="list-style-type: none">・リレーションは確立しているが、ルールの確立が低い。・学校生活意欲、ソーシャルスキルはともに高い値である。



【分析結果】

- ・発言力のある児童の言動により全体のルールが崩れ始めてきている傾向がある。
- ・教員から見て活気があるように見えるが、人間関係は固定化した小集団に留まったまま、小集団同士の関わりが少なくなっている。その結果、児童の積極性が弱くなり、学級の中で活躍したり賞賛されたりする場面が少なくなっている。



具体的な取組

※次ページ参照

【目指す学級集団像】

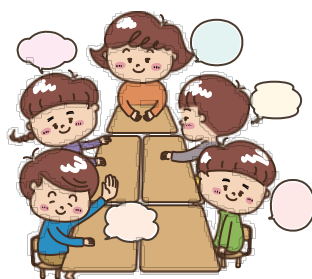
- ・児童がルールの大切さを意識して、自ら守ろうとする集団。
- ・自分たちで行事を計画したり、学級の問題を解決したりする集団。

具体的な取組

《児童がルールの大切さを意識して、自ら守ろうとする集団》を目指した取組

○みんなでルール設定

年度当初に学級で決めたルールについて、定期的に学級活動等の時間でルールの必要性、大切さの確認をすると同時に振り返りを行い、ルールの再検討、改善をした。その際、担任は学級集団の状態に合わせたルールが設定されているかどうかの確認を行うこと、また、児童の意見を取り入れながら、学年目標、学級目標、担任の思いから離れたものとならないように注意した。



○教員もルールを守る

学級で決めたルールの内容を児童だけでなく、担任も守るようにした。担任にとって守ることが難しい場合でも、「始まりのチャイムは、みんな（児童）が守る。終わりのチャイムは先生が守る」というように、担任もよりよい学級生活を送るためにルールを守る姿勢を児童に示した。

《自分たちで行事を計画したり、学級の問題を解決したりする集団》を目指した取組

○学級レクリエーションを児童主体で

学級活動において、児童主体で学級レクリエーションを企画、運営させた。その際、学級集団の状態や児童の能力に合わせて、小グループでの意見交換をする時間を確保したり、事前アンケート等を取り入れたことにより、一部の児童の意見のみで話が進んでいかないように配慮した。

○行事の中で全児童に活躍の場を設定

学校行事に関わる役割、係を細分化して、事前準備で一役、当日の取組で一役というように、合わせて一人二役与えて、児童全員が行事を通して自己有用感を感じることができるようにした。役割、係を決める際には、嫌な仕事の押し付け合いが起こらないように、児童一人一人の能力に合わせた役割を児童が主体的に引き受ける姿勢を持たせた。そのために、担任は日頃から児童の多様性を含めて人それぞれに得意なこと苦手なことがある中で、集団で協力して行事を成功させるために必要な考え方を伝えた。

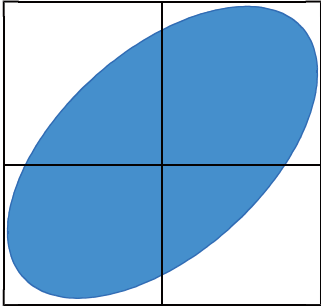


【取組後の学級の状態】

- ・児童の意見を取り入れたルールの設定を行ったことによって、ルールを守ろうとする意識が高まり、互いに注意し合って高め合う姿が見られた。
- ・児童が主体的に活動できる機会を増やしたことで、授業中に発表する児童や学級生活をよりよくするためのアイデアを出す児童が増えた。また、学級内の様々な仕事や作業を積極的に引き受けてくれる児童が増えた。

(3) 荒れの兆しのある学級集団（荒れ始め型）での取組事例（C中学校 1年生 27人）

【現状の把握】

教員の観察、面談等による把握	Q-U等の結果
<ul style="list-style-type: none"> ・自分勝手な発言、行動により授業の進行を妨害する生徒が数名いる。また、それに同調してしまう生徒もあり、注意できる生徒はいない。 ・人間関係が固定化しており、互いに牽制し合う雰囲気があるため、建設的な発言、行動がしづらい。 	<div style="text-align: center;">  </div> <ul style="list-style-type: none"> ・ルール、リレーションともに確立が低い。 ・学校生活意欲の友達関係の値が高い生徒が少ない。



【分析結果】

- ・ルールを守る姿勢が弱く、自分勝手な振る舞いをする生徒がいる。他の生徒はその生徒に同調したり距離を置いたりしている。
- ・学級内の人間関係が希薄で、互いを認め合い、高め合おうとする雰囲気がない。



具体的な取組

※次ページ参照

【目指す学級集団像】

- ・ルールの必要性、大切さを知り、最低限のルールが守れる集団。
- ・声を掛け合い、助け合うことができる集団。

具体的な取組

《ルールの必要性、大切さを知り、最低限のルールが守れる集団》を目指す取組

○ルールの「見える化」

具体的な授業の心得等を示し、年度当初の学級開きで趣旨を丁寧に説明し、どの教員が授業をしても定着が図れるように、教室の黒板の横の見えやすい場所に掲示した。

○今は「□□する時間」

授業を中心に様々な活動の中で、聴くとき、書くとき、考えるとき、話すときなど、今何をすべき時間なのかを活動に入る前に随時確認した。その際、時間がかかっても生徒が自分で判断したり、級友からの声掛けを待ったりするなど、高圧的、管理的な指導にならないように心がけた。

授業心得！

【ポイント】

- ① 先言後礼
- ② 机・イスは無音で引く
- ③ 座る時には座骨を立てる

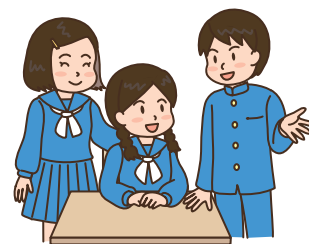
【授業前後のあいさつ】

- ・チャイムが鳴る（1分前まで）
- ・学級委員「部立」 立止位置はイスの左側
イスを机の中に戻す
- ・学級委員「黙を黙ってください」 ホック・リボンの確認
- ・学級委員「礼」 「お願いします」 1、2、3
(ありがとうございました)
- ・学級委員「着席」 イスを引き、静かに座骨を立てて座る
(静寂)

《声を掛け合い、助け合うことができる集団》を目指す取組

○新たな人間関係を意識した班編成

複数の小学校から入学してくるため、同じ小学校出身者同士が固まりやすくなることから、出身小学校が違う生徒同士になるよう班編成を行い、積極的に構成的グループエンカウンターを通して、様々な生徒とふれあう機会を作った。



○誰でも発表できるように

グループ学習後の意見を全体で発表する生徒を、座席の場所や出席番号等でランダムに指名した。誰が発表者になってもいい状態を作ることで、グループ全員が積極的に学習活動に助け合いながら参加できるようなきっかけを作った。

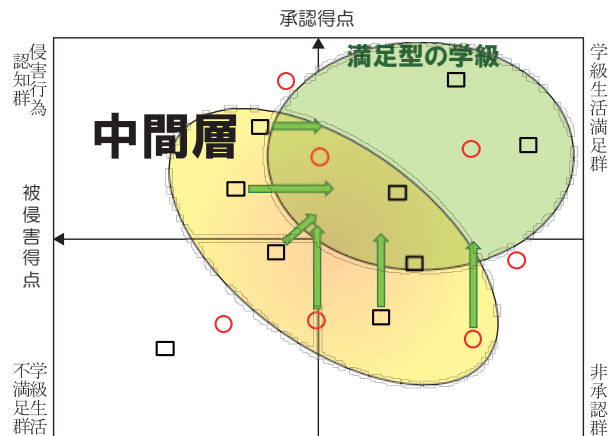
【取組後の学級の状態】

- ・ルールの「見える化」を行い、くり返し意識させることでルールが定着し、授業中の生徒の態度が改善され、ルールを守ることで学校生活が充実することを実感する生徒が増えた。
- ・新たな人間関係を意識した班編成を行い、班活動やグループ学習を積極的に取り入れた結果、学級の誰とでも分け隔てなく関わる雰囲気を作ることができた。

(4) 中間層の生徒への取組事例 (D中学校2年生 人数25人)

中間層の動きが学級集団を変える

右図のようなプロット図の中央付近に位置する「中間層の生徒」に対する取組は、比較的指導の効果が表れやすく、結果的に学級全体の雰囲気を左右することにつながる。目立たないところで頑張る中間層の生徒をしっかりと承認することは、学級全体の状況を改善する上で効果的である。



【現状の把握】

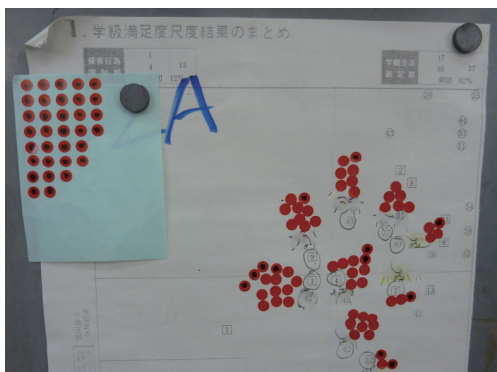
- ・学級の状態が不安定で、一部の生徒の対応に追われ、取組の成果が表れず、学級全体の雰囲気が悪化している。

【分析結果】

- ・中間層の生徒が、一見問題なく見えることから、取組の対象から外されている。

具体的な取組

- ①プロット図を拡大コピーしたものを職員室の生徒が見ることのできないところに掲示し、中間層の生徒の名前を記入して、学年団の教員で中間層にいる対象生徒を共有する。
- ②対象生徒を承認したら、その生徒のところにシールを貼る。(左下の写真)
- ③1週間後、シールが貼られている生徒、貼られていない生徒を学年団の教員で確認し、情報交換する。(右下の写真)
- ④さらに1週間、③のシールが貼られていない生徒を意識して承認するようにし、シールのない生徒がいないようにする。



ターゲットの可視化



取組により教員の協働性が高まる

〈資料〉

「落ち着いた学級づくり支援事業（平成29年度）」の概要

1 趣旨

学校生活における児童生徒の個々の満足感、意欲及び学級集団の状態をアンケートによって測定できる心理検査を活用し、学級集団等の状態を客観的に把握することで、いじめや暴力行為、不登校等を未然に防止し、児童生徒一人一人が尊重され意欲的に学習や活動に取り組むことができる落ち着いた学級づくりを推進する。

2 実施校

小学校167校、中学校75校（小学校は5年生、中学校は1年生で実施）

3 心理検査の種類

hyper-QU・・・小学校141校、中学校63校

Q-U・・・小学校24校、中学校6校

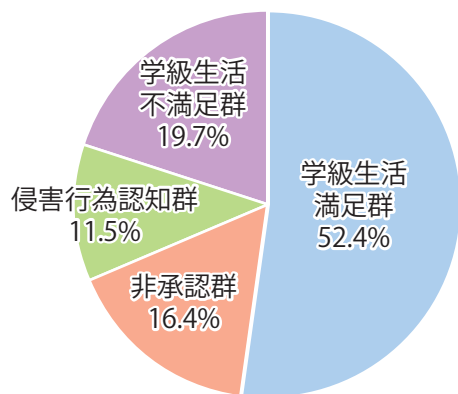
i-check・・・小学校2校、中学校6校

※次の4、5、6は、Q-Uとhyper-QUのみの結果等を掲載

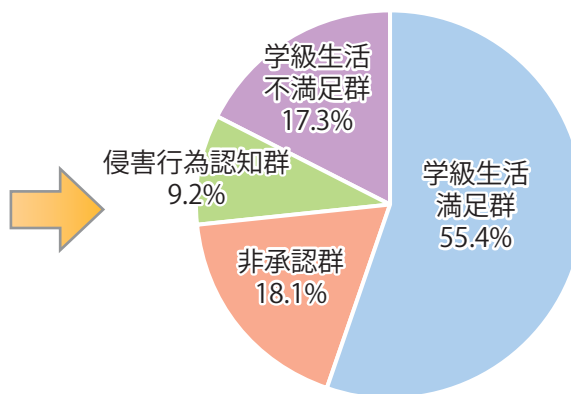
4 プロット図の4つの群ごとの児童生徒数の割合

【小学5年生】

1回目 3,978人

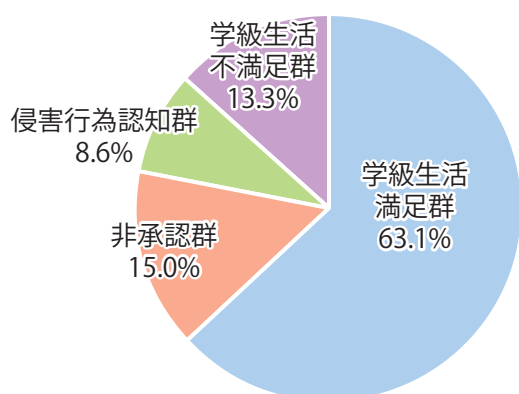


2回目 3,982人

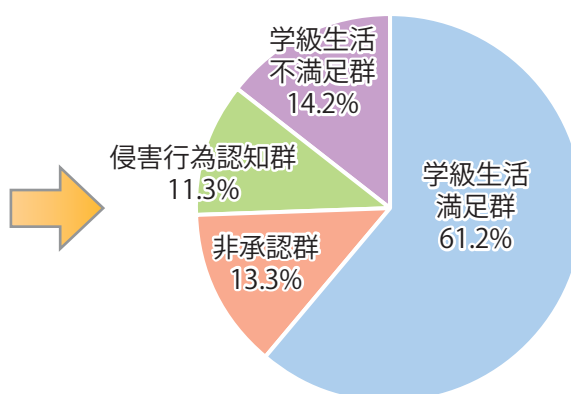


【中学1年生】

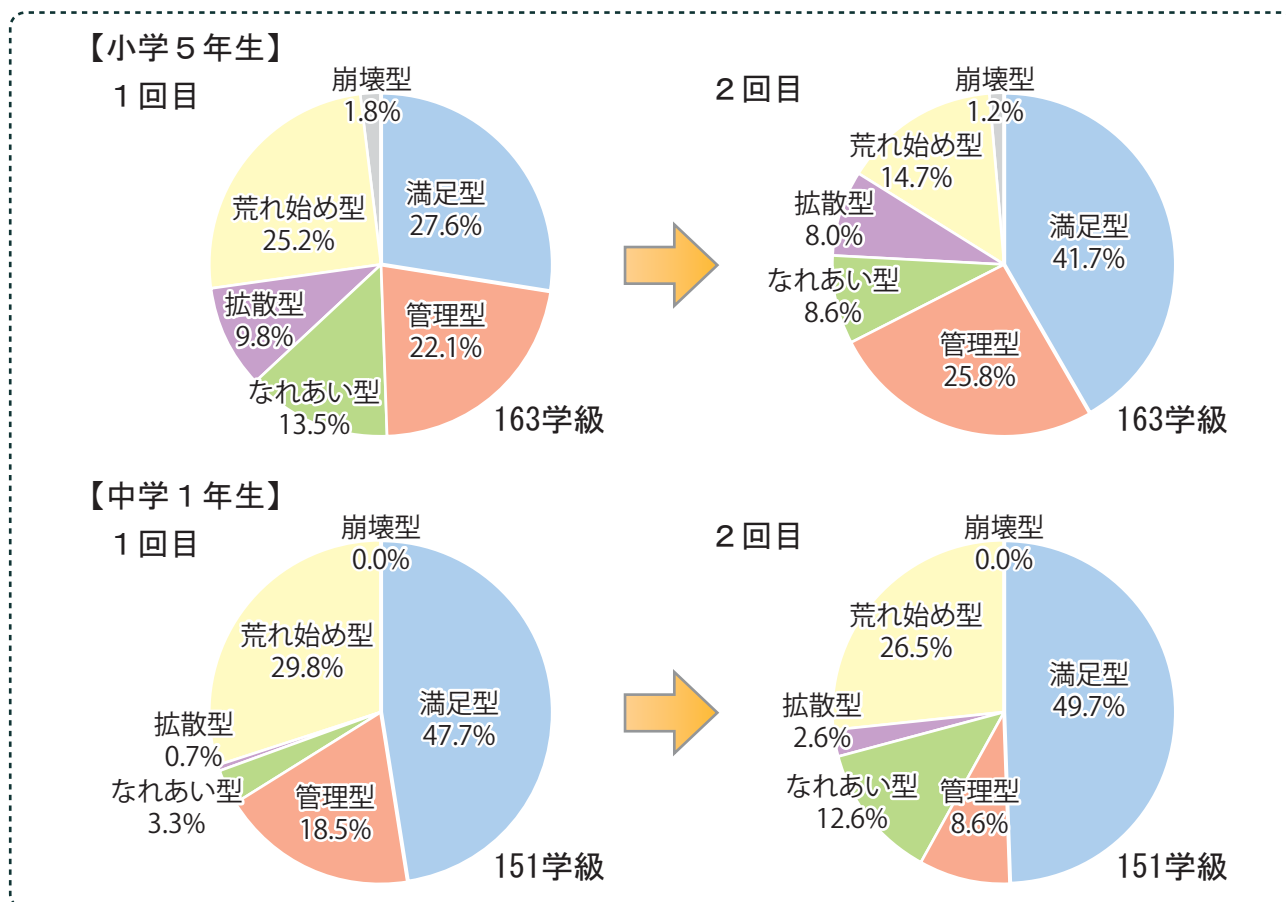
1回目 4,394人



2回目 4,370人



5 学級集団型ごとの学級数の割合



6 取組の成果・課題

プロット図の4つの群ごとの児童生徒数の割合について（前ページ4参照）、1回目と2回目の結果を比べると、小学5年生では、学級生活不満足群、侵害行為認知群の児童の割合が減少し、学級生活満足群の児童の割合が増加しており、よい傾向を示していると言える。また、中学1年生では、1回目も2回目も学級生活満足群の生徒の割合が約60%と、小学5年生より高い数値を示している。しかし、1回目と2回目を比べると、非承認群、学級生活満足群の生徒の割合は減少し、学級生活不満足群、侵害行為認知群の生徒の割合は増加している。これは、プロット図で言うと全体的に左に動き、ゆるみが見られる傾向が強くなったと言える。

また、学級集団型ごとの学級数の割合についても、1回目と2回目の結果を比べると、小学5年生では、2回目で、荒れ始め型の出現率が減少し、満足型の出現率が高くなっていて、全体としてはよい傾向にあることが分かる。しかし、中学1年生では同様の変化はほとんど見られなかった。これは、1回目の検査を実施した頃は入学して間もない頃で、前向きな気持ちで学習や活動に取り組もうとする生徒が多かったが、2回目の検査を実施した頃は、入学時のような緊張感がなくなり、ルールの確立が弱まり、トラブルやいじめの不安を抱える生徒が増加したためと考えられる。

4、5で示した割合は、全体の傾向を表しているだけで、個々の学級の状況は様々で、同じ学校内でも学級ごとに見ると差が大きい状況にある。具体的問題解決のためには、個々の学級や児童生徒の実態を的確に把握し、それに応じた手立てを実践していくことが大切である。そのためには、例えば校内研修で1回目よりも2回目の結果がよくなった教員の実践を分析し、その学校や学年に合った取組を共有する等の心理検査を活用した校内体制の確立が今後の課題である。

落ち着いた学級づくりに向けて
～Q-U、*hyper-QU*を活用した課題対応～

平成31年3月発行

岡山県教育庁人権教育課

住所：〒700-8570 岡山市北区内山下2丁目4番6号
電話：086-226-7612